

親子パネル調査から見えてきたこと

この速報版では、同一の子どもと保護者を2年間追跡することで、勉強が「嫌いから好き」になった子どもの特徴を明らかにし、学習意欲と自ら学ぶ力の獲得との関連性について分析と考察を加えた。主な結果は、以下の2点である。

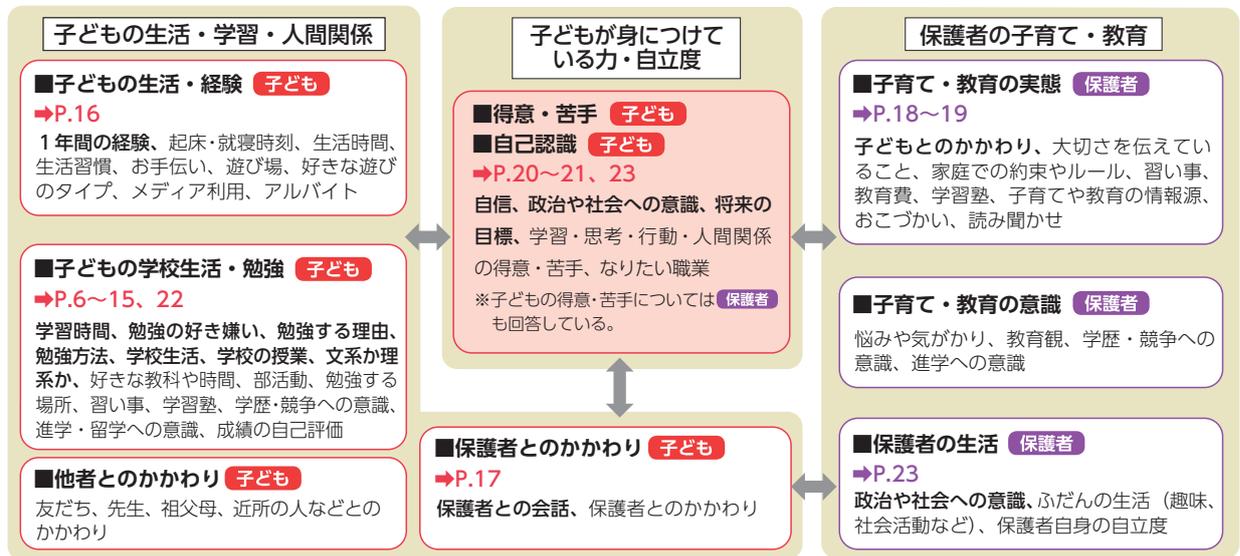
- 1) 学年が上がるにつれ、勉強が「好きから嫌い」になる子どもが多いなか、勉強が「嫌いから好き」になった子どもも1割前後いる。かつ、この子たちは学習時間が伸び、成績も上昇している。
- 2) 勉強が「嫌いから好き」になった子どもは「嫌いなまま」の子どもに比べ、内発的動機づけが高く、さまざまな動機づけで学習し、また学習方略を多く活用している。

今後この親子パネル調査を継続することで、自ら学ぶ力を獲得する子どもの学びのプロセスや保護者のかかわりの影響についての分析をさらに深めていきたい。

* 「主体的な学び」はベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する実態調査」で示した教育心理学の「自己調整学習」理論に基づき、作成した学習モデル (http://berd.benesse.jp/up_images/research/Survey-on-learning_ALL.pdf)

調査設計

「子どもの生活・学習・人間関係」の意識・実態や「保護者の子育て・教育」の意識・実態が、「子どもが身につけている力」や「自立」の程度とどのように関連しているのか、また、それらが高校卒業時点での「自立」にどのようにつながっていくのかを明らかにできる設計である。



※上記以外に、子どもの属性、保護者の属性に関する項目を尋ねている。 ※本速報版に掲載している項目を太字で示している。

基本属性

●子どもの性別(学校段階別)



注1 小1~3生は保護者の回答。

注2 2015-2016 は2016年の学年。